

風景画に至るまで

—「樹木」を媒介とした「感じ入る風景」の生成—

1322917 美術研究科デザイン専攻 CAI QIN

論文要旨

本研究は、創作者が自然と出会うなかで生じる「感じ入る」体験、そしてその体験が積み重ねて内面化していくことから立ち上がる「感じ入る風景」をどのように捉え、風景表現へと展開できるのかを明らかにすることを目的とする。「感じ入る風景」とは、視覚だけではなく、身体感覚や感情、記憶が重なり合うことで生成される精神的な空間である。本論文では、その過程を具体化する媒介として樹木に注目する。樹木が風景を構成する視覚要素であると同時に、創作者の感情や思考を触発する契機として機能するという仮説に立ち、さらに、芸術家たちの風景画と筆者自身の創作経験を往還的に分析し、多文化的な視点を踏まえたながら、風景表現における「感じ入る」プロセスの生成と可視化のあり方を考察する。

本論文では、はじめに研究の背景と目的について明らかにした後、研究の問い合わせその仮説を引き出し、それに対する研究方法を明確した。

第1章では、風景の概念を整理し、「景観」との違いを踏まえ、風景が主体のまなざしによって生成される経験であることを論じる。日常と非日常、外部と内部といった視点の揺らぎは、風景の発見における重要な契機となる。その際、自然との偶発的な出会いを通じて生じる多感覚の「感じる」経験が、情動や意味を伴って内面に浸透し、記憶や感情として蓄積され、その積み重ねにより、直感的体験が内面化され「感じ入る風景」として主題化される過程を提示した。さらに、この風景の発見は絵画や詩歌を通して他者と共有され、社会や文化の意味へと定着する。特定の要素が視覚や感覚の焦点として際立つ場合もあり、本研究では媒介の存在として「樹木」を取り上げた。

第2章では、風景における樹木の役割、を自然物の存在から文化的象徴、さらに個人の感情や記憶の投影に至るまで、多面的に考察した。樹木の生長構造や形態に基づき、擬人化的表現やインゴルドの「マウンド」論を通して生命の循環を示し、柳田国男の風景観や筆者自

身の生活経験を踏まえ、樹木が「住まうこと」と結びつく媒介的な存在である。さらに、生活に根ざした信仰や儀礼、詩歌などの事例を参照し、樹木が社会の中で感情や記憶を宿す象徴であることを論じた。「感じ入る」体験で、樹木が契機として、人と風景を結びつける触媒的役割が示された。

第3章では、画家たちの作品を取り上げ、樹木表現を通して風景との向き合い方を検討した。李成、郭熙の山水画から呉冠中、東山魁夷やフリードリヒまで、風景が空間を生かす要素から、個人の記憶や感情、象徴の空間とする表現へと展開してきた過程を整理した。さらに、ホックニーの多視点構成やロペスの凝視による時間の堆積を通じて、風景は固定的な対象ではなく、創作者の身体や記憶、時間感覚と交わる生成的なものとして可視化されてきたことを表明した。これらの考察は、樹木が芸術家ごとに異なる形で風景経験を体現していることが示すと同時に、筆者の「感じ入る風景」を位置づけ、自身の制作過程を論じる際のひとつつの参照として機能する。

第4章では、筆者自身の取材やスケッチといった制作実践を通じて、「感じ入る」経験がどのように風景画へと接続されるかを分析した。偶然の出会いから生まれる即時的で多感覚の体験は、時間とともに身体の記憶や文化の背景と結びつき、重層的に再編されて「感じ入る風景」が立ち上がる過程を示した。また、異文化体験による自然への視線の変化や、創作の独自性に与える影響も検討した。その過程で樹木は、空間に垂直性と時間の蓄積を示し、生命感を帯び、擬人的に他者のように感じられる。この樹木によって触発された感覚の重なりは編み上げられている感受の線の構成として、風景経験が内面化されることを示した。

第5章では、スケッチや取材によって得られた風景経験が「消化」と「再注視」を経て作品へと結実していく過程を論じる。博士審査展出品作《樹木にひかれている時》を事例に、制作過程における視点や表現の変化を明示し、「感じ入る風景」が作品として結実する具体的なプロセスを提示した。

第6章では、以上の議論を総括し、本論文の結論をづける。